チャレンジ！

～海辺の館の新展開～

2

博物館の新しい試み

「モノ」との出会い

これまでに全国百数十館を訪れている自称「博物館フリーク」の私が実感するのは、館の性格により客層が違うことです。例えば、美術系は女性数名のグループ、一人で訪れている若者は美大生風。自然史系は若年層のファミリー。歴史系は熟年のご夫婦もしくは男性一人でじっくり見学しています。

当館もご多分にもれず、普段はどちらかというと年配のお客さんが多いのですが、年に数回、子どもたちが大勢訪れる時期があります。

何といっても一番多いのは夏休みです。この時期は、「鳥」「昆虫」「オモチャ」など、子どもたちが楽しめて、自由研究のヒントにもなるような企画を心がけています。8月も終わりごろになると、課題を手にした子どもたちや、博物館実習や博物館見学レポートなどで訪れる大学生が目立ちます。そして、どの顔も真剣です。

次に多いのは2月と6月。毎年、市内小中学校から博物館見学の申し込みがあります。展示物を指さして、友達同士であれこれ話しながら、熱心にスケッチやメモを取っている子どもたちに遭遇した方もいると思います。

現在の学習指導要領では、小学6年生で歴史の学習が始まります。6月というと、おおよそ弥生・古墳時代のあたりまで授業が進んでいる時期です。当館の歴史展示室に入った左手には、市内の遺跡から出土した資料が縄文時代から順に展示されています。これらを間近で見たり、屋外に復元移築された古墳の中を見学することは、教室で教科書や資料集の写真を見るのと違い、実際の大きさや材質感を伴った三次元的体験として記憶に残ります。

百聞は一見にしかずという言葉がありますが、これこそが資料の持つ強みです。先人たちの生活の証である「モノ」を目の当たりにすることで、今まで以上に歴史に興味を抱いてもらえたならば、願ったりかなったりというものです。

▲見学後にいただいた感想文。とても励みになります。

また、小学4年生の授業では、まだ家庭に電気がない頃の生活について学びます。もはや平成生まれの小中学生ですから、おじいさん、おばあさんと言っても戦後生まれの方もいます。また核家族化が進んだ現在では、お年寄りから古い道具の話を聞く機会も少なくなっています。見学では、民俗展示室で地域の代表的な産業であった織物業の様子や、かつて海岸沿いにあった塩田で使われていた道具などについて学習し、時間に余裕があれば特別展示室で灯火具コレクションもあわせて見てもらいます。解説をしながら一緒に展示室を回ったり、自由に見学してもらい、最後にまとめて質問の時間を設けたりしています。

新しい知識を吸収しようとする子どもたちの目は、とても生き生きとしています。一人でいくつも質問を繰り出してくる未来の学芸員候補と出会うとうれしくなります。

かくいう私も生まれて初めて訪れた博物館は、小学校の社会見学で訪れた「蒲郡市郷土資料館」でした。つまり、現在の職場である博物館です。クラスのみんなと民